

# 男神山の太天狗

## ●男神屋敷

### 民話 6

妙見山は、むかし男神山という。古老の話によれば、天正年間小川の妙見岳より飛星があつて、この山に落ちた。増見讃岐という者、これを見て山に登ったところ、小仏があつた。よつて妙見をここに安置した。その後増見讃岐は不動院と改号し、別当となり、以後一村の鎮守となつた。慶長三年本堂を建立してから、妙見山と呼ぶようになった。

大明神は何の神を祭つたのか、由来不詳の社があつたので、これが山の名となつた。しかし、別の名を女神山とも言つた。里人のことばに、天正の頃この神、宇都宮に飛び移つたため、今は社跡だけ

が残つてゐるという。(白河風土記参照)  
昔、松本は貧しい山峡の村落であつた。それと言うのも土地がやせ、何を作つてもろくに稔らず、収穫は年々減る一方で、よその土地の半分にも満たず、そこでこの土地に見切りをつけ、よそに移り住む者さえ続出するようになってきた。困り果てた里人達は思案のすえ、男神山に祈願をすることに一決。山峡にそそり立つ、男神山を仰いで、来る日も来る日も祈願をつづけていた。月日が経つてある日突然、一天にわかにかきくもり、墨を流したような、恐ろしい空模様となつた。底冷えのする風が吹いたかと思うと、ど

こからか、大きな天狗が男神山にあらわれ、対山の女神山にまたがり、体をふるわし、いきなり脱糞をはじめた。

里人達は啞然となり、ただ天狗のしぐさを、あれよあれよと見守るばかりであつた。天狗はいずこともなく煙のように消えて行き、それはほんの一瞬の出来事でもあつた。

以来、松本の田畑は豊かな農地と大きく変わり、したがつて収益も倍増し、他に見られぬ豊かな里になつたという。

(稿者 森忠一郎)  
『天栄村の民話と伝説』から

